

長畝ふるさと通信

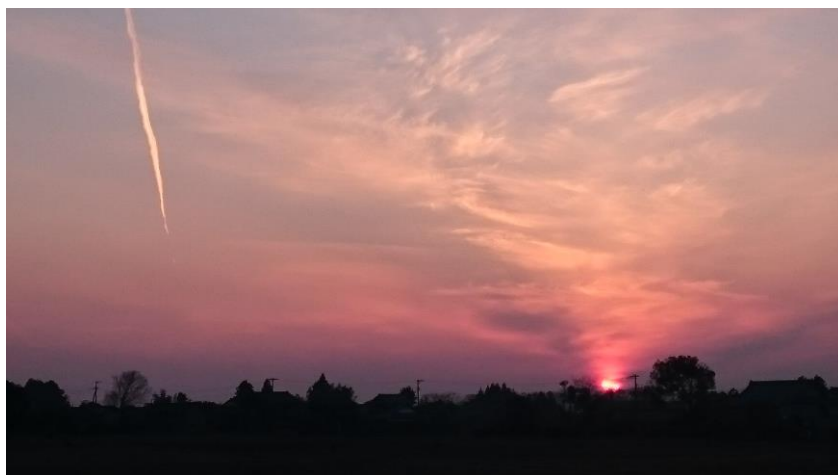
【2019年2月号】

■ 14年連続「特A」

日本穀物検定協会が2018年産の「米の食味ランキング」を発表しました。おかげさまで佐渡産コシヒカリは14年連続、通算26回の「特A」を獲得しました。昨年特Aから陥落した王者「魚沼」も見事返り咲き、コメ王国の面目躍如となりました。今回は全国から154銘柄がエントリーし、過去最高の55銘柄（前年比+12増）が特Aを獲得したそうです。現在ブランド米は全国に750以上も存在していて、まさにブランド米競争は激戦しています。

産地としては評価を得ることで生産意欲の向上や有利販売にメリットがあることは間違いありませんが、消費者にとっては・・・？。圧倒的多数は外食や中食が中心で、特A評価には関心がないのではないのでしょうか。ランキングがワイドショーなどで報道された時、東京に住む娘から「うちのお米は何位？」と聞かれ、「14年連続特A」というと「へ～すごいね」という間抜けな返事が返ってきました。生産者の娘で毎日そのお米を食べていてもこの程度です・・・。

一方で「需要に合った米づくり」という名目で、「安い業務用米」の生産拡大を進める行政や流通業者が増えており、矛盾を感じています。一部のブランド志向と圧倒的多数の無関心層の中で「二極化」が進んでいます。ふるさと納税は地方を応援する趣旨で始まったものですが、今ではその趣旨からかけ離れ、財政獲得手段であり、お得な買い物手段と化し問題となっています。食味ランキングは産地にとって少なからず宣伝効果はあるものの、魚沼のように陥落した時のダメージも大きいのです。消費者が「おいしい」と評価してくれて「消費者に支えられる」産地になることが大切だと思います。（真っ赤な夕日が沈んでいるその横に飛行機雲が・・・北のミサイルではありません）



JA佐渡組合員大会のスローガンは「佐渡らしい持続可能な農業の実現による安心して暮らし続けられる地域づくりを目指して」というものでした。「とにかくコメを売ることが最大の使命でしょう」と心の中で叫びまくりました。

■ 長畝鬼太鼓保存会を結成

佐渡には「鬼太鼓」という伝統芸能があり、500年もの歴史があります。現在でも島内各地に120組もある団体がそれぞれの地域に根付いています。長畝集落の鬼太鼓はこれまでもご紹介してきましたが、中心的に祭りを担ってきた青年会も後継者がおらず、存続が危ぶまれる状態となっています。



「このままでは集落で唯一の祭りが絶えてしまう」という心配は年々増し、とうとう今年「長畝鬼太鼓保存会」を結成しました。青年会OB(つまりボク世代)が結成を呼び掛け、現役世代も賛同して約50名が組織されました。3月2日の結成式(単なる飲み会)では、僕たちの先輩諸氏が活動を続けてきた「長畝農事研究会」(現在も存続しており、最古参は90歳を超えています)が毎年忘年会で食べ続けてきた伝統テッパン食「すき焼き」を再現してみました。長畝農事研究会では当時は



高価であった牛肉のすき焼きを腹一杯食べながら、農業の事や地域の事を熱く語っていて、若かったボクは圧倒されながらその輪に入って酒を呑んでいたものでした。予算の都合で今回は「豚肉」になってしまいましたが地域の伝統テッパン食も引き継ぎたいと思っています。

「祭りがなくなってはさびしい」というのが本音ですが、ムラ社会は「祭りにつながっている」といっても過言ではないのです。地域の伝統を守り、後世に引き継ぐことがその地域で生きていくうえでの重要な役割であり、みんな仲良く支えあう仕組み作りだと思っています。何年やれるかはわかりませんが、やらないよりはマシでしょう。そんな気持ちです。

■ 31年シーズン開幕

温湯消毒作業も終わり、いよいよ31年シーズン開幕です。近年にない暖冬で雪は全くありません。今年も異常気象に振り回される予感がヒシヒシと…。ここ2年の不作で不安要素ばかりが頭をよぎりますが、トキは順調に増えて佐渡にとっては「普通の鳥」になりつつあります。佐渡米も消費者にとって普通に毎日食べてもらえる米になるよう願っています。競争ではなく共存できればいいんですけど。31年産米もよろしく願い致します。



おかわりは自由です。